

P1-035

唇顎口蓋裂を合併する重症心身障害児に対する他科・多職種連携の重要性

高橋 紗耶、梅津 糸由子、白瀬 敏臣、
内川 喜盛

日本歯科大学附属病院 小児歯科

【目的】

唇顎口蓋裂を合併する重症心身障害児は周術期のリスクが高いため、口唇形成術や口蓋形成術が困難とされていることが多い。低年齢時の口腔内の変化は著しく特に重症心身障害児の場合は医科だけではなく小児歯科も早期に介入し口腔内管理や成長発育に合わせた対応が必要となるため、多職種との連携や情報共有が重要と言える。今回、小児科から依頼された未手術唇顎口蓋裂児に対し、小児歯科と口腔リハビリテーション科が連携し主に在宅で口腔管理および摂食嚥下機能評価・指導を行っている5名の患児（男児2名、女児3名、初診時年齢8か月から2歳6か月）への小児歯科での取り組みの中から一例を報告する。

【症例】

患児：1歳3か月、男児（68.5cm、7080g）
既往歴：13トリソミー症候群、両側唇顎口蓋裂、全前脳胞症ほか

現病歴：生後8か月に経口摂食と口腔衛生指導を希望し小児科より紹介され評価後間接訓練を開始し、直接訓練を行うにあたり Hotz床製作のため当科受診。予め主治医に Hotz床装着による呼吸への影響について対診・了承得てから開始した。

治療経過：小児歯科では Hotz床の製作、口腔衛生指導、歯科治療および歯科疾患予防を行い、口腔リハビリテーション科では摂食嚥下専門歯科医が評価後、間接訓練より開始し感染リスクを考慮し主に在宅での支援を行っていた。装置設計は両科で検討し、歯の萌出や顎骨の成長に伴い再製・調整を行った。装着から1年11か月経過した現在も Hotz床の維持は良好であり、新生齲蝕や歯石等は認めず口腔清掃状態も良好である。

【結果および考察】

未手術唇顎口蓋裂を合併する重症心身障害児に対し早期に歯科が介入することで摂食機能ならび口腔機能の向上、歯科疾患予防、顎顔面領域の成長発育の援助が可能となる。また繰り返し患児や家族と接することにより、心理的支援や経口摂食前の患児に対する予防管理の意識向上もできたと思われる。一方、医科において未手術唇顎口蓋裂児に対する Hotz床の重要性の認知度は低い現状にある。症例の中には訪問看護師からの紹介もあり、重症心身障害児の歯科治療には医師、看護師、訪問看護師等の多職種の理解、協力および見解の一致が必要不可欠であり、積極的な情報交換・共有を行い周知していくことが重要である。家族の希望や患児の口腔内変化に対応出来る知識と経験を持つ専門医療の提供ならびに支援が望まれる。

P1-036

ようこそ日本・千代田区へ！おもてなしの 歯科診療 視覚的説明タブレット

山崎 てるみ、松崎 祐樹、甲田 彩理沙、
林 陽佳、内川 喜盛、白瀬 敏臣、梅津 糸由子、
高橋 紗耶

日本歯科大学附属病院 小児歯科

【目的】

近年、当歯科大学附属病院では日本語を理解出来ない患者数が増加傾向にある。通訳者同伴を病院規則としているが、患者さんが連れて来ることはほぼない。コミュニケーションの難しさに加えて文化や歯科医療に対する考え方の相違もあるため、円滑な診療が難しいのが現状である。本研究では、2020年東京オリンピック時に外国人患者数が増えることを見据えて、患者さんが安心して受けられる歯科診療、さらに歯科医療者側のスムーズな診療を実現するために、多言語対応視覚的説明ツールを作ることを目的とした。現在までの進捗状況を報告する。

【方法】

- 1) 2017年度東京都千代田区「千代田学」の助成を受けて研究を行った。言語は交付条件として英語と中国語および韓国語であった。
- 2) 歯科診療場面を抽出後、簡潔な説明文を作成し翻訳した。それぞれ状況を表現したイラストを作成し、言語+イラストの視覚的説明ツールとしてタブレット上で患者に示せるようにシステム化する。

【結果(経過報告)】

- 本研究の準備として1)と2)を優先して行った。
- 1) 患者情報聴取用紙と医療面接用紙の改良
言語が理解出来ない状況での医療面接前に、ある程度状況を把握し、説明の予測をたててから患者を受け入れる準備をすることが必要である。すべてチェックボックス式とし、歯科医療者が理解しやすいように日本語併記とした。
 - 2) 同意書類の作成
言語がうまく伝わらない環境下での治療に関するトラブルを軽減するため、相互理解の食い違いが起こり得る可能性や緊急時の身体抑制についてなど「治療開始前」に必要な同意書を作成した。
 - 3) 歯科診療場面の抽出と各場面における説明文の作成
臨床でありうる歯科診療場面の抽出を行った。説明文については日本語で作成後、翻訳を行った。

【考察】

既存の説明ツールやテキスト、会話集は、患者さんへの指示や手順、診断を伝えることなどには有用だが、個人個人に合わせた状況や診断に至った理由、患者さんの疑問や質問に答えることは難しい。本研究で、患者さんの「なぜ？」にも答えられる場面まで抽出可能となったのは、私たちが日々歯科臨床に従事し、多くの場面に出会っているからであると考えている。今後はイラスト制作、すべてタブレット上での使用できるようにするなどシステムを構築かつ簡便化し、臨床応用を目指していく。